

相互行為の資源としての異文化

—日本人学生と留学生の話し合いにおける成員カテゴリー化の実践を中心に—

森本 郁代 (関西学院大学)

1. はじめに

本研究の目的は、大学における日本人学生と留学生の話し合いにおいて、「異文化」がどのように有意味 (relevant) になっているのかを、成員カテゴリー化 (Sacks, 1972) の実践に焦点を当てて明らかにすることである。成員カテゴリーとは、相互行為の中で参加者を特徴づけるのに用いられる属性のことであり、「男性」「教師」「親」「若者」「30代」といった、性別、社会的・家庭内の立場、年代や、本研究が対象とする「日本人」などがそれに当たる。西阪 (1997) が指摘しているように、従来の異文化間コミュニケーション研究は、参加者の文化的アイデンティティを特徴づけるカテゴリーを、対象とする現象の説明変数と捉え、それらのカテゴリーがその現象にどのような関連性を持っているかどうかについては考慮されてこなかった。西阪 (1997) は、ラジオ番組における外国人留学生に対するインタビューの緻密な分析によって、「異文化間」であることが所与のものではなく、そのつどの相互行為の具体的な展開を通して成し遂げられることを例証している。本研究も、話し合いの中で、「異文化」がどのように有意味になっているのかを、「日本/日本人」といった参加者の出身国を用いた表現に焦点を当てて分析を行う。

2. 成員カテゴリー化

成員カテゴリー化の実践を見る上で重要なのは、Sacks (1972) が定式化した成員カテゴリー化装置が、そのつどの相互行為の組織化にどのように関わっているかである。成員カテゴリー化装置とは、カテゴリーの集合とその適用規則から成る。カテゴリー集合とは、家族 {父, 母, 子など}, 学校 {教師, 学生など}, 病院/医療 {医師, 患者, 看護師など} といった、一つ以上のカテゴリーを要素として含む集合のことを指す。ある人物に対してカテゴリーが適用されている時は、そのカテゴリーが属するカテゴリー集合が適用される。例えば、診察室で「先生」と呼びかけた場合、相手を「医師」としてカテゴリー化すると同時に自らを「患者」としてカテゴリー化している。他方、成員カテゴリー化の実践は、必ずしもカテゴリー名を使って行われるわけではない (串田・平本・林, 2017)。後で詳述するように、本研究においても「日本」「韓国」など参加者の出身国名による場所の定式化が、カテゴリー化を実践している事例が多く見られた。

3. 分析データ

分析対象とするデータは、日本人学生、韓国人留学生、中国人留学生の3名によるグループディスカッション9回分である。「ペットの殺処分を減らすにはどうしたらよいか」「SNSの利用に年齢制限をつけるべきか」「学校の給食費の未納問題を解決するためにはどうすべきか」というテーマで、それぞれ20分間の制限時間内で結論を出すよう指示をして話し合いをしてもらい、その場面を録画したものを分析に使用した。

4. 分析

分析の結果、「日本」や「日本人」など出身国のカテゴリー名が用いられるのは、相手の国に関する情報を求めたり、自国の情報を提供したりする場合がほとんどであった。さらにこうした情報要求や情報提供が、意見の主張、疑問の提示、相手に対する反論などの行為の媒体 (vehicle) となっている例も多く見られた。以下では、3つの断片を取り上げて、国名によるカテゴリーの使用が、そのつどの行為の組織化においてどのような資源となっているのかを分析する。

断片1は、ペットの殺処分を減らすにはどうしたらよいかというテーマで話し合っている場面で、この断片の直前で、センは、動物愛護センターが、スペース不足のため保護された犬や猫を殺処分せざるを得ない現状について書かれた記事を紹介し、1行目からハナが殺処分の仕事について感想を述べ始めている。

【断片1】20161105_1_G4

01 ハナ: =a みんながやりたがる仕事じゃないから:

02 カン：>うんうんうん.<
03 ハナ：ましてやこう：殺処分(0.6)か(.)かわらなきゃいけないかもし[れないってなった]ら：
04 カン： [うんうんうん.]
05 セン：う：ん。
06 (.)
07 ハナ：大好きじゃ-犬,d ハナ動物好きじゃないとやっつけられへんけど,
08 カン：うんう：ん。
09 ハナ：動物好きであれば好きであるこそ：
10 カン：うんうん。
11 ハナ：殺処分[を,つらい]っていう。
12 カン： [なるほどなるほど.]
13 カン：矛盾です[ね。
14 ハナ： [矛盾[する,
15-> セン： [あの,韓国はどう-(.) どうですか?
16 (0.8)
17 ? :hh
18->カン：いやわたし:, [犬好きなんですけど: [犬の毛のアレルギーがある[んですよ。
19 セン： [はい. [はい.
20 ハナ： [ha ha ha ha ha
(21 行略. カンが犬が好きだがアレルギーがあるので飼えなかったという話をする))
42-> カン：え,とにかく:,>そうすね<だから:,そんな,詳しい事情までは知らないんですけど:,
43 セン：はい。

ハナが動物愛護センターで働く職員の辛い心情について感想を述べると、カンは「矛盾です」と評価を行って話をまとめ、ハナも 14 行目でそれに応じ、この時点で、この話題が終了に向かっていることが観察可能となる。この次の話題に移ることも適切となる位置で、センが「あの、韓国はどうですか?」と質問をする。この「韓国」が国名による場所の定式化 (location formulation: Schegloff, 1972) であることから、センがそれまでの話題を「日本」の現状として理解しており、そのため、日本と対になるカテゴリーとして「韓国」が選択されたことが分かる。さらに、この定式化によって、この質問が韓国人のカンに向けられていることが公然化する。0.8 秒の沈黙の後、18 行目でカンは応答を開始するが、冒頭の「いやわたし:」は、「韓国人であるカンは韓国の殺処分の現状に精通している」というセンの質問の前提に抵抗を示し (串田・林, 2015)、50 行目で「詳しい事情までは知らない」と自分に知識がないことを表明する。このように、それまでの話題を「国」と関連づけて理解し、その国の出身者に情報要求をすることには、「異なる国の出身者」によって話し合いの参加者が構成されていることに対する彼らの指向が示されている。

次の断片 2 でも、国名による場所の定式化が用いられている。この断片は断片 1 の後の部分で、カンとセンが自分たちの国では犬を食べる習慣があると述べたのに対し、ハナが昔は日本人も犬を食べていたかもしれないと話していた。

【断片 2】20161106_1_G4

01 ハナ：でも少なくとももう:, (0.8)今は絶対ないですね[犬食べるのは。
02 セン： [huh huh
03 カン：うん。
04 ハナ：100 ノーたぶんないしみんなゆつたらうえーって言うと思う。
05 (0.8)
06 カン：そうっすね.=
07 ハナ：食べない。
08 (.)
09->セン：え!日本には馬は食べま°すね°。
10->ハナ：あ!馬食べる。
11 セン：>でも<中国では馬は食べない[です。
12-> ハナ： [¥馬おいしいよ。¥[huh huh [huh huh huh ha ha ha ha ha
13 カン： [ああ. [おいしい.h 食べたことあるんだ。
14 セン： [huh huh huh
15 ハナ：[ありますあります.]
16 セン：[(あの:)] ¥お刺身は食べました。¥
17 カン：う：ん.=
18 セン：=え,お鶏だ.友だち「あこれ馬だよ」馬でなん-なんですか,(0.6)さっきはうま:と:たぶん小さいの子ども:たぶん,ニワトリみたい[の:と:,
19 カン： [うん。
20 ハナ：う：:ん。
21 セン：でも馬は,d-辞書を調べてあ!,そういう馬ですか。
22 カン：うん。
23 セン：そうそう[そう驚いた。
24 ハナ： [fu ha ha ha

25 (0.6)
 26 カン：なるほど。
 27 ハナ：食べる：[(馬はある：)
 28 セン： [おいしいですけど。
 29 ハナ：おいしいおいしいけど.hu hu hu
 30 セン：でも[()
 31 ハナ： [ちょっと、たぶんギョッとすると思う。[=わたしも最初にだす-出されたときはギョッとした。(0.6)しかも=
 32 カン： [なるほど
 33 ハナ：=刺身で出てきたんですよ。
 34 カン：う：[ん。
 35 ハナ： [生で。
 36 セン：そうですね。
 37 (.)
 38->ハナ：え、あれはたぶん：大陸とかの人には：結構敵しいとゞ思う。ゞ
 39 セン：huhuhu そうか。
 40 (.)
 41->ハナ：日本人なんでもすぐ生で食べるから。
 42 セン：huh huh [huh huh
 43 ハナ： [huh huh huh
 44 カン：ゞ生で結構食べま[すね。ゞ
 45 セン： [ゞそうです。[食べますね。ゞ
 46 ハナ： [全然 (火) とおらへんから：.平気で生で食べる。

9 行目の「日本には馬食べますね」という発話は、「日本」による場所の定式化を通して、「日本人」が馬を食べることの確認として聞くことができる。同時にこの発話は、今でも犬を食べる韓国や中国と違い、日本は少なくとも現在は犬を絶対に食べないというハナの主張に対して、同じように通常食用とは考えられない馬を日本も食べているのではないかという反論としても聞くことができる。続く 11 行目の「中国では馬は食べません」という情報提供とともに、犬を食用とすることをめぐる中国と日本の立場が馬については逆転することを指摘することで、ハナに対する反論を行っている。ここでも、馬を食べる慣習が参加者の「国」と結びつけて理解されている。

それに対し、ハナは 10 行目で「馬食べる」と認めた後、12 行目で「馬おいしいよ」と、馬肉に対する評価を行い、自分が馬を食べた経験があることを表明する。つまり、「日本は馬を食べますね」と尋ねた時点では、まだハナを「馬を食べる日本人」としてカテゴリー化しているとは言えず、「日本人の慣習について知識がある者」と見なしていると聞くことができるのである。ハナに対する「馬を食べる日本人」としてのカテゴリー化が達成されるのは、ハナ自身による評価を通じた経験の表明によってである。13 行目のカンの「おいしい、食べたことあるんだ」という発話も、ハナをそのように捉えていなかったことを示している。このカテゴリー化のプロセスは、断片 1 の「韓国はどうですか」という質問とそれに対する応答にも見られ、カンは「詳しい事情は知らない」と、知識がない者として応答している。杉原 (2010) は、「〇〇 (国) はどうですか」という質問が、続く発話者のカテゴリー化に対して強い拘束力を行使するため「日本人/外国人」というカテゴリー化が生成されるとしたが、断片 1 と 2 では、質問を「〇〇 (国) についての知識を持つ者」と聞くことが可能であり、応答者に対するカテゴリー化は、質問者と応答者の間の相互行為によって達成されている。

12 行目でハナが馬がおいしいと述べたのに対し、カンは驚きを示し (13 行目)、センは「おいしいですけど」(28 行目)と述べ、両者とも馬食に対する否定的な評価を示す。そしてこれは、ハナに対する否定的な評価と聞くことも可能である。すると、ハナは、「大陸の人」(38 行目)と「日本人」(41 行目)というカテゴリーを用い、それぞれの評価を個人としてではなく、出身国の文化として一般化することで、カンとセンの否定的な評価を自分自身に向けられたものとは聞いていないことを示す。ここでは、出身国によるカテゴリー化の実践が、参加者間の対立を回避する手段として用いられている。

次の断片 3 は、話し手が自分の主張の根拠として自国の情報を提供している事例である。この断片では、日本人のショウと韓国人のアン、中国人のエンが、SNS の利用に制限をつけるべきかについて話し合っている。エンは、LINE の友達追加機能に対する疑問と不満を語り、14 行目で中国ではチャットのツールにそのような機能はないと述べている。

【断片 3】20161105_2_G1

01 エン：でもじゅうっさいで[SNS 使ったら:<めっちゃ>や-
 02 アン： [10 歳かあ。
 03 (1.4)
 04 エン：危険と思いますね：=
 05 アン：け[：
 06 エン： [知らない人と交流[さ-(.)ま、親とか>友だちとか<SNS で：あの交流できるん=
 07 ? : [うん
 08 エン：=ですけど、万が一知らない人と：あの追加したらどうしますか？(0.4)あと、

- 09 ショウ:う[ん].
 10 エン: [LINE といふとこ-(0.4)といふもので:わたしも自身使っているんですけど, (0.6)なんかさ:あの, (0.9)全然
 11 知らないの人で無理矢理に追加する場合があるんで, そうゆーそう:すゑ-(.)たらなんか(ひたい)できないんですよ.
 12 ショウ:う:ん.
 13 アン:°これ°むずいなあ:..
 14 →エン:中ご[く:は, [あの一応, (.)チャット:の道具は, 無理矢理[あの追加:することがないんですよ.
 15 アン: [heh heh heh]
 16 ショウ: [はい].
 17 ショウ:う:ん.
 18 エン:で, LINE はなぜ, その無理矢理:なんか知らない人ばかりで.
 19 (1.6)
 20 アン:いや::hh
 21 ショウ:huh huh huh よく(h)わ(h)[か(h)ん(h)ない.
 22 アン: [ちよつと[なんとも>言われへんわこれ:.=
 23 エン: [LINE の-
 24 エン:=ま, そういう条件したら:なんか(.)[LINE が経営する会社で:
 25 アン: [なんなんや(もう)
 26 ショウ:う:ん.
 27 エン: [い-(.)まあ一番, 最初から,>だから<[(つかわな)い]方がいゝかな:..
 28 ショウ: [まあ, 人-
 29 ショウ:使う:利用者に向けて制限をするというよりも提供してる:会社に対して:(.)え:それなりの:[配慮をしるといふ: ことですか
 30 アン: [う:ん.
 31 エン:そうでねまず会社:..
 32 ショウ:まそれは賛成ですなほくも.

14行目の「中国」という国名での場所の定式化は、エンがLINEを日本のSNSだと理解しており、それと対になるSNSを指示する手段として用いられている。同時に、自国のSNSにはLINEのような追加機能がないことを引き合いに出すことで、自分にはLINEに対して不満や疑問を述べることの正当性があることを主張している。ここでも、この話し合いの参加者が「異なる国の出身者」であることに対して敏感であり、それを行為の組織化に利用していることが見てとれる。

5. おわりに

国名による場所の定式化は、自分たちが「異なる国の出身」であることに敏感であると同時に、相互行為を達成するための資源として利用されていた。参加者たちにとって、「異文化」が常に有意義であるわけではないが、異文化性もまた、相互行為の組織化において利用可能な資源の一つであることが示されたといえる。Schegloff (1972)は、話し手による聞き手の成員カテゴリーの分析が場所の定式化に反映されていることを示し、場所の定式化と成員カテゴリーが密接に結びつきうることを指摘したが、本研究のデータでも場所の定式化が受け手のカテゴリー化の手段として用いられていた。その一方で、「日本人/韓国人/中国人」という国籍によるカテゴリー化の例は断片2など数えるほどしかなかった。国名による場所の定式化は、相手を「〇〇人」としてカテゴリー化するが、断片1と2で示したように、「〇〇国の事情に精通する者」として聞くことも可能である。国籍カテゴリーではなく国名による場所の定式化が用いられたのは、「〇〇人」という明示的なカテゴリー化を避けることに参加者が注意を向けていたからかもしれない。この点については今後さらに分析をしていきたい。

付記 本研究は科学研究費補助金基盤研究(C) (課題番号:16K02831)の助成を得て行われた。

謝辞 本研究のデータに関し、戸江哲理氏(神戸女学院大学)および山本真理氏(関西学院大学)から有益な示唆を得た。

参考文献

- 串田秀也・林誠(2015). WH 質問への抵抗—感動詞「いや」の相互行為上の働き. 友定賢治(編)感動詞の言語学. ひつじ書房, 169-211.
 串田秀也・平本毅・林誠(2017). 会話分析入門. 勁草書房.
 西阪仰(1997). 相互行為分析という視点—文化と心の社会学的記述. 金子書房.
 Sacks, Harvey (1972). On the analyzability of stories by children. In Gumperz, J. John & Hymes, Dell (Eds.), *Directions in Sociolinguistics: The Ethnography of Communication*, 325-345. Holt, Rinehart and Winston, Inc.
 Schegloff, Emanuel A (1972) Notes on a Conversational Practice: Formulating Place. In Sudnow, D. (Ed.), *Studies in Social Interaction*, 75-119. The Free Press.
 杉原由美(2010). 日本語学習のエスノメソドロジー—言語的共生化の過程分析. 勁草書房.